

惜別

この5月「久しぶりに 江口サロンの人たちに会えた」と紹介した仲間

言葉と心の壁越える達人(朝日新聞 惜別より)と愛された 江口一久さんが急逝



また、ひとつ 僕の仲間のつらい話を伝えねばなりません。
この5月のホームページで「江口サロンの人たちに会えた」と紹介しばかりの神戸の仲間 江口一久さん
西アフリカの民話の収集・研究者でその語り部である言語・民族学者 国立民族学博物館名誉教授
その江口一久さんが、6月14日駅での転倒事故で、ほんの一瞬にして亡くなってしまった。

どこにいても、日曜日にはその土地の教会へ行くというクリスチャンで、10ヶ国語を越える言葉が話せるという言語学者ではあるが、言葉がわからなくても、初めての人でも、どこでも 話の輪の中に飛び込み そのうちに、言葉も内容理解できるというまさに達人言語民族学者といわれた。
私とは正反対というか、どこでも飛び込んで直ぐ酒をくみかわし、肩を組んで踊ってお友達・お仲間。後先が逆で、行動を起こす人。それでいて、字者としての鋭い視点・思慮を持つ論客でもあった。

「ほな、今度一緒に行き、ええ酒の飲めるで」と青森の三内丸山遺跡のお月見の会に連れて行ってきて、縄文の道にままるきかけを作ってくれた人である。

また「民博で、西アフリカおはなし村の特別展、そこで、多くのボランティアの語り部が語る西アフリカの「おはなし」の展示やるんや。手伝いに来てや」と、「おはなしの展示って、それ何」とついつい引き込まれて、ここでも多くの仲間と引き合わせてくれた。(2003年4月から10月)

バオバブの大きな木を会場に据え、その傍に語り部の語るお話の家をつらえて、多くの語り部が常時、西アフリカの昔ばなしを語り、アフリカからやってきた仲間や語り部、そして会場にきた人みんな一緒になって、バオバブの木の周りを、ジャンベの太鼓にあわせて踊り回ります。その先陣、いつも、彼がいたのも懐かしい思い出。

語り部としても、本当にすごい実力で、登場人物になりきった語り口は、むかし話を聞いているというより、独り芝居についつい引き込まれてゆく、楽しいものでした。

このおはなし村がベースになった「地球おはなし村」を起こして、その村長として活動を進めて、民博退官後もこのおはなし村活動とアフリカフルベの民話収集・研究をつづける現役で、フルベの昔話の意味を語りとともに、みんなに伝えつづけ、アフリカを思い、「平和」を託きつづけた行動のひとつだった。

「アフリカのために、また何かやろうや。また、15日、御所の中でお茶会とおはなし村やよ、京都で一杯どうや」と話したのが最後だった。

くちぐせは「まあ、そやな、ひとつよろしく」
まとまらない時でも、また、独り突出して取捨がつかなくなった時でも、にこっと「ひとつよろしく」

「江口さんの、ひとつよろしくには、まいるわ」といりながらも、みんな引き込まれてついてゆく世界に多くの友達を持ち、多くの人を愛し、愛された人でした。

まだまだ、聞かしてほしかった昔話。また、博識の先を見据えた地球人の話等々

本当に残念で「まっかりと、穴があいたような気持ち。

彼の「ひとつ、よろしく」が耳に残っています。

ひとつ付き合いの下手な私にとっては、分け隔てのない達人の心には、何とか少しでも近づきたいものです。

また、彼がこよなく愛した「地球おはなし村」

この活動が彼のDNAを受け継いで、ますます、広がってゆくことを期待しています。

2008.6月 by Mutsu Nakanishi



2003年4月 民博 特別展「西アフリカおはなし村」より

【参考】

1. From kobe 2008.5月「久しぶりに アフリカのむかしばなし と アフリカのリズムを堪能」
江口サロンの人たちに会えました
<http://mutsu-nakanishi3.web.infoseek.co.jp/walk5/0805kobe00.htm>
2. 2003.7月「バオバブの木の下で 国立民族学博物館 特別展「西アフリカ おはなし村」 open」
<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/walk/mnwalk07.pdf>
3. 2003.8月「「マリ国立民族舞踊団による音楽とおどり」バオバブの木の下でみんな踊って」
<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/walk/mnwalk08.pdf>
4. 地球 おはなし村 home page <http://ohanashimura.web.infoseek.co.jp/>